

連載：第43回 亀ちゃんにも言わせてよ！

美しくない国

反省の色なし

柳沢厚生労働大臣が「女性は子どもを産む機械」と発言したことには本当にビックリしました。こともあろうことが、少子化対策を先導するべき厚生労働省の大臣が時代錯誤も甚だしい女性をバカにしたセンスの持ち主だったのです。本人は、真意は別にあったなどと弁明しつつ頭を下げていましたが、2月6日の閣議後に「若い人たちは、結婚したい、子どもを2人以上持ちたいという極めて健全な状況にいる。若者の健全な希望にフィットした政策を出していくことが大事」と述べたとか（朝日新聞2月6日付夕刊）。これまた時代錯誤の価値観に基づくとんでもない発言です。まったく反省の色が感じられません。結局は、腹の中ではまったく反省していないと言うか、はじめから反省する気はなかったが世間がうるさいのでとりあえず謝ろうかなという程度だったのかと思わざるを得ません。

それと気になるのが、与党（自公）の男性議員も基本的には同じセンスの持ち主ばかりなのではないかと思えることです。発言後の状況を見ると、安部総理大臣をはじめ閣僚・与党幹部たちが柳沢大臣の発言を“女性に対する極めてバカにした物言い”と捉えている様子を感じることができません。また、批判的発言をしている一部の与党議員からも「これでは参議院選は戦えない」といった自分たちの都合に基づく批判のみで、発言内容の本質に対する批判の声が出ていないように見えます。こういった人たちは、柳沢大臣と基本的には同じセンスの持ち主ではないかと私には思えるのですが...

市民は国家の道具？

私が柳沢大臣の発言で感じたことは、女性に対する人格否定だけでなく、子どもにも対する人格否定です。女性は国家のために子どもを産むのではないし、産まれてくる子どもも国家のために生まれてく

るわけではありません。「子どもを2人以上持ちたいという極めて健全な状況」とは、日本が富国強兵のために「産めよ、増やせよ」と国家のために働く道具としての“人”を増やしていた頃の話ではないでしょうか。それは今から見れば、日本が「極めて『不』健全な状況」だった頃のセンスです。その頃の日本では、一般に国民（臣民）には留保付の基本的な権利しかありませんでした。さらに、女性には留保付どころかほとんど基本的な権利がないといった状況でした。子どもはまさに「子供」であり、大人の付属と見られていました。こんな時代のセンスを現代に持ち出して健全も何もあったものではないです。国家のために市民がいるのではなく、市民のために国家があるのですよね。

例えば、子どもは高齢化社会を支えるために生まれてくるのではないし、そのために女性が産むわけではありません。子どもは幸せになるために生まれ、女性は各人が幸せに生きるなかで結婚したりしなかったり、子を産んだり産まなかったりするのではないのでしょうか。そういった一人ひとりの幸せを基礎に、様々な社会制度があるのではないかと思います。

どこが美しい？

安部総理が就任してから教育基本法の改正（改悪）や憲法9条を中心とする改憲論その他の発言をみると、総理が言う「美しい国」とは、国家のために市民がいる国のことではないかと思えます。それは愛国心というより国への忠誠心をもった人々で埋め尽くされた国のことではないのでしょうか。そんな国、すぐ近くにもありますよね。日本政府が最も批判している国の一つですが、気づかないのでしょうか。それのどこが美しいの？

亀山 憲一 [会員・フリーで活動中の法学研究者
(犯罪学・刑事法)]